

「ヨウ云ふた——ヨウ云ふた——吾は顔は不細工やけれど吾の胸が好きや、情は人の爲ならずみんな我身に報ふ物なり。」

「コレ何云ふてんねん、早う開たげなはれ。」

「ヨツシヤ今開たげるで、待や。」(ガラ——)

「ウワー寒む、甚い雪やなア、サア此方へ這入りなアれ。」

「これは千萬忝なう存する。これ玉菊や入れて頂け。」

「サア此方へ寒い——……ウワア—これなんや。」

「某の娘に御座ります。」

「エ、是はお前はんの娘はんか奇麗な女やなア、オイ嬢……一寸此處へ来て見い、吾でも女なら此の人でも女や、同じ女でも甚い違ひや。」

「コレ、人の顔見て何云ふてるねん、早う圍爐裏へ柴を燵べて上んかいなア。」

「ヨツシヤ、ふうう、ふうう、ぶう——。併し見ればお武家さんやがこんな奇麗な娘さんを連て今頃此の邊をうろついて御座るには何ぞ譯が有事やろ、構わなんだら話をして聞かしなはれ。」

「ハイ、お尋ねに預りお耻敷事乍ら自が申す事一通マアお聞き下され。」(三味線合方)

元某は京都禁裏北面の武士、松本丹下と申して是なるは某の娘玉菊と申す者、幼き頃産の親に別れ

乳母を附て養育せしが生長の後殿の御目に叶ひ差上よとのおうせ、差上れば寵愛一方ならず、夫が爲他の家中の者の誹を受け、彼は謀叛者なぞと云ひたてられ家諸共没收、便る可き處も無く是なる娘の乳母紀州加太淡島邊に居るとの事風の便りに聞き、遙々尋ね参りしに最早死去致して居らず、寥々歸る道すがら今宵の雪に難澁致す者御推察下され。」

「ア、さやか嬢話を聞くと氣の毒な譯やなア。」

「ナアこちらの人、話を聞かんうちなら兎も角も、ア、聞いた上は出發とくなはれとも云へん、どうや誰も知つてゐる者が無いのを幸に今晚内證で泊て上て明朝早う出發して上たらどうや。」

「ヨウ云ふた、ヨウ云ふた、吾は顔は不細工なが吾の胸の中が好きや、情は人の爲ならず、みんな我身に報ふ物なり。」

「あんな事ばつかり云ふてる。」

「あんな腹はどうや。」

「未だ、夕飯食ずに御座ります。」

「嬢、夕方何處へもはまらずやと。」

「こちの人、はまらずやない、食まずとはまだ食べずやと云ふてはるのや。」

「ア、そうか雑炊でも上へな。」